

氏 名(生年月日)	田 中 優 香 (平成1年2月16日)
本 籍	山 梨 県
学 位 の 種 類	博 士 (歯 学)
学 位 記 番 号	甲 第1171号
学位授与の日付	平成30年2月23日
学位授与の要件	
学 位 論 文 題 目	残存歯の咬合支持の違いからみた高齢者の咀嚼能力
論 文 審 査 委 員	主 査 五 味 治 徳 副 査 新 井 一 仁 菊 池 憲一郎

論 文 内 容 の 要 旨

高齢者における残存歯の咬合支持と可撤性義歯装着の有無からみた咬合状態が咀嚼能力に影響を及ぼすか否かを明らかにする目的で、65歳以上の女性149名にグミゼリーを主咀嚼側で咀嚼させたときの咀嚼能力（グルコースの溶出量）を測定後、主咀嚼側の咬合支持で5群（G1：臼歯部咬合支持なし、G2：第一小臼歯で咬合支持あり、G3：第二小臼歯まで咬合支持あり、G4：第一大臼歯まで咬合支持あり、G5：第二大臼歯まで咬合支持あり）、可撤性義歯装着の有無で2群に分類し、それぞれ各群間で比較した。次いで、年齢とグルコースの溶出量との関係を調べ、以下の結論を得た。

1. グルコースの溶出量は、咬合支持が多いほど多くなった。
2. グルコースの溶出量は、可撤性義歯非装着者群のほうが可撤性義歯装着者群よりも有意に多かった。
3. G5のデータから正常範囲を設定すると、可撤性義歯装着者の67%が正常範囲にあった。
4. 年齢とグルコースの溶出量との関係は、いずれの群においても両者間に相関が認められなかったが、全被験者では両者間に有意な負の相関が認められた。

論 文 審 査 の 要 旨

本研究は、高齢者にグミゼリーを咀嚼させた時にグルコースの溶出量について分析したものである。その結果、咀嚼能力は歯の喪失により低下するが、可撤性義歯の装着により半数以上が第二大臼歯まで咬合支持がある者のレベルに回復できること、残存歯の咬合支持が変化しなければ加齢により低下せず、咀嚼能力を維持できる可能性が示唆された。以上は、高齢者の咀嚼能力の評価に際し、貴重な資料を提供するものであり、歯学に寄与するところが大きく、博士（歯学）の学位に値するものと審査する。